

風の末裔シリーズ・7th シーズンの3
～風の足跡(あしあと)・Ⅲ～



く青い蜜柑く

草原の遙か南西の山岳地帯。

万年雪の頂を見上げる直下に、歳を重ねた巨大杉が密生する古い森林がある。曲がりくねった根茎は地形を複雑にし、その下に幾つもの天然の洞穴を作っていた。

こんなしのつく雨に沈んでいると、太古から時間が止まっているように見える。

雨煙の中、一騎の馬影が、灰色の雲を割って降下する。

「まったくこの雨って奴は、くすくすじとじと鬱陶しいったら悪態をつきながら、入り口のシダの水滴を散らせて入ってくる黒い人影に、洞穴の奥で座す水色の妖精は、口の端を上げて苦笑いをした。

「水は嫌いか？」

「嫌ってんじゃねえ、砂漠じゃ命の源だからな。空から、のべつまくなしに惜し気もなく降って来る様が、何か節操なくて好かないんだ」

水色の妖精は返事をせず、下を向いてクッククックと何かを思い出し笑いをした。

人影は、多分、顔をしかめた。

「あいつは、いねえのか？」

「外だ。ここの真上の木のてっぺんじゃないかな」

「雨が降ってんのに、わざわざ？」

「あの子は雪とか雨とか、天から落ちて来る物が大好きなのさ」「わっかんねえ奴」

太古のシダに埋まった古森の中心に、樹齢千年は越える杉の老木が王のように立ち、その梢に、片羽根の少年の姿があった。

雨に濡れているのに、少しも寒そうではない。森の向こうの丘陵の、黄色い花の群落を見ながら、目を三日月みたいに細めている。

「伝令を持って来たのではないのか？」

水色の妖精は、座したまま人影に聞いた。

「ったくヒトをいつもいつも伝書鳩扱いしやがって」

「感謝を求めるのなら、幾らでもしてやる」

「それが感謝する者の態度か？」

影は悪態付きながら、黒衣のマントを開いて、懐の皮靴から、一通の手紙を出して突き出した。

「一通？」

「ああ、いつものはこっちで、こちらは姉者からだ」

「ルウシエルか」

水色の妖精の敵(いか)つい目元が緩むのを、影は見逃さなかつた。

「ふふん、大した用事じゃないだろ。たまにはシンリイ連れて遊びに来て言っていた」

「ああ、全てが片付いたらな…」

「……」

二通の手紙を出しても、鞆にはまだ膨らみがあった。

「今日は、シンリイの分もあるんだ」

「あいつは文字が読めないぞ」

影は鞆を持ち上げて、中の青い蜜柑の果実を見せた。

妖精はまたクククッと笑った。

「お前が直接渡してやれ」

黒衣の人影が果実を届けに外に出ると、待ち構えていたように、洞穴に、エコーのかかった声が響いた。

「……『鍵』は今、どの付近にいるっく」

姿は見えない。洞穴内の壁を伝い這つような、低い囁き声。

「まあ待て…、せっかちな」

水色の妖精は、二通の手紙を広げた。

「…草原の東端…国境の山麓だな。心当たりはあるか？」

「…ない…全くない。本当に大丈夫なのか？」

「って言っても、こちらは『鍵』に頼るしかないだろう」

「……同道は、年端も行かぬ子供一人だということではないか。やはり、そなたが導いた方が、確実なのではないか？」

「子供の怖さは、あなたが一番知っているだろう」

「……」

声は黙って、洞穴その物が呻くように震えた。

「心配なさんな、成るようにしか成らん。この三年、ボクにもあなたにも、蒼の里の取っ掛かりすらをも、見付ける事が出来なかつたんだから」

「……」

「お互い、ヤキが回ったな」

ファアとタウト、そしてナユタの三人は、三年前まで蒼の一族が飛び回っていた草原を、端から端まで、てくてくと旅をした。青く連なる山々の向こうは人間のいう隣国で、その向こうはよく知らない。世界は果てしなく広く感じた。

でも、ファアもタウトも、以前の焦りを、もう感じていなかった。

ナユタが旅に加わって、何かが特別に進展したって訳ではない。彼に会うまでの二人は、蒼の里が行方知れずになった原因を突き止めようとしていた。何か大きな敵が現れたんじゃない

か？ 災害が見舞ったんじゃないか？」と。

しかし誰に聞いても、蒼の妖精達は日常の続きを平凡に行なっていただけだった。大きな災害が起こったという話もない。

もっとも子供二人に突き止められる程度の事態なら、とっくにシドか誰かが解決していただろう。

どんなに高い山でも歯を喰いしばって登る覚悟があるのに、山すら見付からなけりゃ、気持ちだって萎える。二人が風露に蒼の長の息子をを訪ねたのは、そんな焦りの末だった。

ナユタが加わって、蒼の里捜しに進展はなかったが、何も変わらなかった訳ではない。例えば、ファーが眉間にシワを寄せたガミガミ言うのが減った。タウトがむくれてワガママ言うのもなくなった。

何でかというところ…。

「では最後に蒼の妖精が来たのは、川の増水を見に来た時で…」

いつものように村人に情報を聞いている二人の遠くで、ナユタの頓狂な声が響く。

「ファー、タウト、見て見てっ！ 川で布をサラシテルんだって。すっごい色が変わるんだよ！」

「ナユさん、今はそんな関係なくて…」

「でも…あ、ほらほら、今度はあーんな長い布。綺麗だねえ！」

「もっと近くでご覧になりますか？」

「え、いいんですかあ！」

てな感じで、村人に勧められるままに、裾まくりして川にサブザブ入って行っちゃったりする。で、頬を染めた娘ッコに、やってみますかと布を渡され、案の定掴み損ねて流れる布を追い掛け、案の定滑って転ぶのだ。

ファーは呆れてガミガミ言う気力も失せ、タウトはワガママ言っている場合じゃなくなる。

子供二人は、旅の最中、出来るだけ、そこで生活する者達の邪魔にならぬよう心掛けていた。

ナユタはその真逆。でも……

毛布にくるまれ震えながら焚き火に擦り寄る青年に、村人達は笑いながら、熱い湯茶を勧める。その笑顔は、二人の知る『他人への愛想笑い』とは、別の物だった。

「思い出したよ、前に蒼の妖精さんと、あんたと同じ事をやらっしやった方がいたよ」

「へえ？」

「ほら、おめえが若い時」

「ああ、あん時ね！ カッコイイ妖精さんとね、いつも来なさ

るのを楽しみにしとったっけ。で、あたしもウブだったから、構って貰いたくて、わざと目の前で布を流したんだ。したら、拾ってくれようと川に入って、ズルツザン」

「悪いと思っただけど、皆で大笑いしちゃったさ」

そんな感じで、そこを離れる時は、沢山のお土産と、何だかそれ以外の物も、沢山貰っているのだ。

ナユタが加わって、一気に飛べなくなった分、歩みは遅くなった。でも、早足だと見逃していた足元の物を、ゆっくり歩いて拾えている感じだった。

「ああ、そう、昔、軒から落ちた鳥の雛を戻そうとしてくれて、やっぱりそんな風に落っこちた蒼の妖精さんがいたっけ」

通りすがりの木霊の森で、雨漏りの修理を引き受けて案の定落っこちたナユタの背中に濡布を貼りながら、木精のお婆さんがしみじみ言った。

「蒼の妖精でもそんなドシなピトがいるんだっ」

「でもね、獣達が争って殺伐としていたこの森を、粘り強く皆の話を聞いて、治めてくれたのよ。またあんな事が起こったら今は助けてくれるピトはいない。不安でしょうがないね……」

「……」

台所で薬湯を煮ていたその家の娘が、ひょっこり顔を出した。

「ドシだったって、あの方は確か、蒼の妖精さんではなかったでしょ。だから仕方なかったじゃない」

「えっ?」

「肌の色が焦げ茶だったもの。そうそう、南方から、蒼の里のお手伝いに来ているって言っていたわ。イイオトコだったよ、っ」

「ファーが目を真ん丸にして、息を吐くみたいに言った。」

「西風の?」

「ん? うん、そうだったかしら」

「シドっ」

「ああ、そうだわ、シドさんだった。何、あんた知り合い?」

「……父さま」

旅は、蒼の一族の行方を探すというより、彼らの足跡を辿っているみたいになっていた。

三人とも、蒼の一族を殆どほとんど知らない。その三人が、少しづつ紐解くみたいに、蒼の妖精の存在を肌で感じるようになって行った。

そうして、草原の短い夏が、瞬く間に過ぎ去った。

季節は風を変え、草原を黄金にがねに染める。

三人の旅は、すっかり様変わりしていた。『蒼の里を捜す』という本筋は変わらない。しかし、行く先々で、何だか色々やる事が出来た。

「うちの子の癩の虫がどうどう」

「隣村とのいさかいがどうどう」

ナユタを蒼の妖精だと思っけ持ち込まれるそうだった相談にあちこちで見聞した知識が、結構役に立つのだ。特にいさかいは、双方の言い分を聞くと、単純な行き違いだったりする。

三人に大した知識が備わった訳ではない。ただ、はめ込めばいいパズルのピースの有り場所を知っているだけ……って感じだった。

「蒼の一族の始まりもさ、どうだった感じだったんじゃない？」

すっかり行者然な風貌となったナユタが、ハイマツに腰掛けながら言った。

今、三人は、蒼の里があったという草原台地の、小高い丘の上にいる。ここには何度か訪れているが、どんなに目を凝らしたって、やはり、蒼の里のカケラも見えない。

「どうだった感じって？」

生っ白くてヒョロヒョロだったタウトは、遅く日焼けして、一丁前にカゴが作れるようになった。

「最初にここに住み着いた連中が、ヒトの面倒見が良過ぎて、それが当たり前になって、何だか信仰されて、否定するの面倒だからと放っといたら、それで収まっちゃった」

「あはははは」

「無茶苦茶ね」

ファーは、びっくりする程背が伸びた。髪を短く切って、顔がほっそりしたせいもある。うなじや肩のラインも滑らかに大人びて、旅立った時とは別人だ。

それから、へファーはぐって言うのをやめた。

「あたしは、蒼の一族の歴史を母さまに聞いている。そんなじゃないわよ」

「はいはい、何べんも聞かされていますよ。ずーっと昔に西の山から降りて来た、神サマに近い種族だろ。でもさ、歴史なんて、後になって何とも言えるじゃん」

顔を上げて口を尖らせるファーに、ナユタは文句を言わせる暇なく喋り続けた。

「じゃあさ、僕らが、ここから始めてみようか。パオを建てて井戸を掘り、家畜を飼って畑を作る。近隣の村のよろず事を引

き受けながら、便利屋として暮らすんだ。蒼の里、一丁上がり
ってね」

言っている事の奔放振りに、ファーはいつも怒るのを忘れて
笑わされてしまう。

「ぶふ、そう出来たらいいわね…」

夕陽の陽射しがあるのに、毛布にくるまってつづくまる彼女
の顔は、土気色だった。西風の妖精は寒さに弱くて、北の草原
では冬は越せない。

「あたしは、蒼の妖精の母さまの血が入っているから、結構大
丈夫よ」

そう言っていたファーだが、風が冬の空気を孕んで来ると、
みるみる体調を崩して行った。

「明日にはきっと元気になるわ。今日よりは暖かくなりそうだ
もの」

「そっだね、ファー、だから今晩はもう休みなよ。後はやっと
くから」

「うん…、ごめんね、タウト」

気丈夫のファーが素直に弱い声で言っただけで、天幕に入る様を見て、
男二人は顔を見合わせた。

「タウトは大丈夫なのか？」

「うん、そっだね、慣れないからちょっとだけ堪える…かな？」

二人してへこたれる訳には行かないから、言わないだけなの
かもしれない。

本当の冬が来る前に南に戻り始めないと、多分取り返しがつ
かなくなる。二人は何となく目でそう会話をした。だからキリを
付ける為、ここに来たのだと。

——旅を・・・終わらなければならぬ……

「ナユさん、一緒に南に行こうよ。ナユさんなら砂漠の真ん中
でも海の底でも、逞しく生きていけるよ」

「ヒトをバケモノみたいに…」

それきり二人は、薄暮に色をなくして行く草の海を見つめて
黙ってしまった。

満天の星夜に天の川が横たわる。明日からは、旅の終わりの
期間に入る。

野營の天幕を離れ、ナユタは独りで、草原の真ん中まで歩いて
来た。ここで記憶の端の父や姉が、蒼の妖精の日々を営んで
いた。彼等は今、何処かでこの天の川を見ているのだろうか。

パキリと草を踏む音に振り向くと、タウトだった。

「寒いんじゃないか？」

「うん、大丈夫…、ナユさんがいなかったから」

「散歩したかっただけだよ」

「いなくなっちゃいそうな気がして」

「まさか」

「蒼の里みたいに」

「……」

月が沈むと星々は輝きを増し、何処まで空で何処から地なのか分からなくなる。

「僕はとうとう君達の役に立てなかったね。せっかく手を握って一緒に来てと言ってくれたのに」

「……」

「ヒトにあんな風に求められたのは、初めてだったんだ」

タウトは空を見上げて、白い息と共に喋った。

「蒼の里が、ヒトに安心を与える信じる心の依り処なら、僕はもう見付けているのかも知れない」

「えっ？」

「ナユさん、前にお姉さんの話、してくれただけでしょ」

「うん…」

「僕のお姉ちゃんもね…スゴい綺麗で、スゴい頭がいい。そし

て、母様の巫女の才能を、ちゃんと受け継いでいた。約束されて生まれて来たみたいなのヒトだった。小さい時から母様に付いて厳しい修行をした。僕は、才能を受け継いでいないから、やらなくていいって言われた」

「……」

「母様が死んで、お姉ちゃんが巫女を継ぐ事になって、その日の夜。父様が、お姉ちゃんに、本当の事を話すって言ったの。ねえ、そんなの、扉の向こうで耳にしたら、思わず立ち聞きしちゃってしょっしょっ」

タウトは、ナユタの方に向き直った。彼は真っ直ぐにこちらを見つめている。

「お姉ちゃんの本当のお父さんは、父様じゃなかった。それはいいんだ、何となく気付いていたから。その後の話…、僕が生まれたせいで、不幸になっちゃったヒトがいる」

「えっ？ タウトのお父さんが…そんな事を言ったの？」

「言い方は違ってたけれど、どんなに繕ったって、結果そうなんだ。この子のせいで、幸せにしたいヒトを不幸にしてみました…僕はそう思われながら育て来たんだなって。この子さえいなければ…って、何回も思われたんだらうなって」

「タウト……」

「そう考えたらもう、頭の中から自分がポロポロ崩れちゃってさ。消えてしまいたくなくて、村を出て砂漠に飛び出して、めちゃめちゃに歩いて…」

タウトは苦い顔をして、言葉を切った。

「ちよっと喋り過ぎちゃった。こんな事、ファーには言っていないんだ。…ナイシヨね」

「ああ」

「僕の旅の目的は、その不幸になっちゃったヒトに、笑って貰う事だった。ぶっちゃけ、そのヒトを幸せにして、へんげだっかって皆を見返してやりたかった」

「……」

「そのヒトに、僕の存在を、認めて貰いたかったんだ…」

「……」

少年は、離れた所にちらつく野営の残り火と天幕を向いた。

「あいつだって一緒だよ。『お兄ちゃん』より大事にして貰いたかったんだ」

「……」

「だけれど、もう大丈夫なんだ。ナユさんがここまで連れて来てくれたから」

タウトはもう一度、天を仰いで白い息を吐いた。

「僕達これから、もつ何にも頼らず縛られず、自分の力だけで、大切なヒトを幸せにするんだ。蒼の里は、無くてもいい」

—— 星々が一斉に瞬いた ——

〈噛み合わなかった訳だ。『鍵』が子供の方だったとは〉
タウトの耳元で、声がした。

「えっっっ」

—— パシリ!! ——

甲高い音と共に、自分の立っている所から、地面に十字に火花が走った。

びっくりする間もなく、足下の地面が消えた。

「ああっ、うわっ！」

タウトは腕をひと掻きして、落っこちた。

落っこちたといっても、一瞬だ。次の瞬間には、土の地面に

尻餅付いて、尾てい骨を打った。

「痛ったあ…」

身を起こして驚いた。

さっきまでの夜闇と星は何処へ行ったのか。

そこは明るい昼間だった。しかも、草の海の草原ではなく、ヒトの気配のある何処かの立派な村だった。

「ナユさん?」

一本道を歩いて来るヒトがいる。

しかしそれは、ナユタではなかった。水色の長い髪がボサボサ広がった、痩せた若い男のヒトだった。何かゴツチャリ詰まった大きな木箱を、ズルズルと引きずっている。

「ここは何処だか聞こうと思ったが、そのヒトの姿は近付いても、ハッキリ見えない。輪郭がぼやけてユラユラして、水鏡に映したようなのだ。」

自分が寝惚けているのかしら? タウトは一生懸命ピントを合わせようとした。

「——見るな!!」

さっきの音が、また耳元でした。

振り向いたが、誰もいない。声は今度は反対の耳に移った。

「時間が大分ずれている。波長を合わせてしまうと、時間の歪みに引っ張られて、戻れなくなるぞ」

「誰なの?」

辺りを見回そうとしたが、白い霧(もや)が急に立ち込めて、何も見えなくなった。さっきの木箱のヒトも、いつの間にか消えている。

今度は、後ろにバタバタと足音がした。

ナユさん? 今のヒト?

振り向くと、そちらの霧が晴れて、子供二人が手を繋いで駆けて来る。オレンシの瞳の女の子と、頭ひとつ小さな男の子。やっぱりぼやけているが、男の子の背中に、細い緋色の羽根が揺れているのが分かる。

「ぶつかる!」と思った瞬間、二人はタウトを通り抜けて、後ろに駆け抜けた。笑い声がこだまみたいに通り越して行った。

子供達の後ろから、一人の大人が走って来る。今度のヒトは、ぼやけていても、タウトには、はっきり分かった。

「エノシラさん!」

「ファーのお母さん…面影はハッキリしているが、ずっと若い。待ちなさい!」と遠くに聞こえて、彼女もタウトを通り抜けて消えた。

陽炎みたいに霧が立ち込めた中、タウトは、そっと呟いた。

「ここは…蒼の里? 時間のすれた、過去の、蒼の里?」

「賢いな」

さっきの音が答えてくれた。

「出来るだけ心を無にして、じっとしている。もうじき、時間軸が合う。こちらから干渉出来る位置まで来たら、引っ張り戻してやるぞ」

「貴方、誰？」

「心を無にしろって言ったろ！」

それから、時々霧が晴れて、色んなヒトや馬が通り過ぎたけれど、タウトは耐えて、突っ立っていた。

周囲の風景は、スローモーションみたいにカクカク動いたり、急に流れるように速くなったりした。ナユタやファーがどうしているか気になったけれど、声の言い付けに従って、何も考えないように努力した。

今度こそ、心を無にするのが難しくなった。

目の前に歩いて来た二人の男の子の片方が、鮎色の肌のファーだった。直感で、ファーの捜しているお兄さんだと思った。輪郭の揺らめきも少なくなると、声もはっきり聞こえる。きくと時間が今現在に、近付いているんだ。

「めっきり寒くなったなあ。厩番さんに、お前ら大丈夫かって心配されちゃった。砂漠に帰る事、そろそろ考え始めなきゃ駄目かな——」

「長殿は、日にちは僕らが決めればいいって仰っていたよ、レン——」

「雪は見たいよな、カノン——」

タウトは背筋に電流が走った。レンと呼ばれたファーの兄の横を歩く、青銀の髪の少年。

記憶が蘇った。

うんと小さい時、森で出逢った、父様と同じ髪色のカノン！あの時この子は、父親に会いに来たんだ！

「馬鹿者、行くな！」

さっきの声が響いたが、最後の方が小さくフェードアウトした。

「あっ！」

タウトは前のめりに転んだ。

「大丈夫？」

目の前に少年の顔が覗き込んだ。砂漠の月の屋根で見つめた、西風の長様と同じオレンジの瞳。

「ね、君、どこから現れたの？ 空から降って来たの？」

呆然とするタウトに、少年は手を差し伸べた。青銀の前髪の下の斜めの傷痕まで、くっきり見える。

「あれ……？ 何処かで会った？」

「ううん！」

タウトは跳ね起きて、顔を隠すように背中を向けた。

「さっきのヒト?! ねえ、さっきのヒト!!!」

耳元の声はもう聞こえない。あのヒトの声の届かない、時の歪みに落ち込んだじゃったんだ!

「カノン、そいつ、蒼の妖精じゃないぞ。怪しくないか?」

「僕達だって蒼の妖精じゃないだろ。ね、君、誰かとはぐれたの?一緒に捜してあげようか?」

「~~~~!!」

タウトは、一生懸命一生懸命、考えた。目の前の少年達は、もうすぐ砂漠に帰ると言っていた。自分が迷い込んでしまった隙間は、多分、彼らが留学した三年前の秋だ。

稲妻みたいに閃いた。

この後何かが起こって、蒼の里がどうにかかって、彼らは帰り損ねるんだ。今なら、防げるかもしれない。自分の力で出来なくても、蒼の長とやらにその事を告げれば!

タウトは意を決して振り向いた。

「あの、蒼の長殿に伝えたい事があるんです、急ぎなんです!」

「えっ、長殿? えーと、カノン、長殿は仕事?」

「今日は坂の上の執務室だと思っつけれどっ!」

カノンは男の子をまじまじと見て、首を傾げた。

「んー、やっぱり、会った事がある気がする……!」

タウトは二人の脇をすり抜けて駆け出した。

坂の上、坂の上……、とにかく登ればいいんだ!

角で馬桶に蹴つまづいた。飼葉をぶちまけた方向に急な登り坂があり、その先に天啓のように、大きな立派な建物が見えた。きつとあれだ!

頭に割れ鐘みたいな声が響いた。

〈阿呆! 過去に関わる奴があるか! 今なら戻れる、とつとと戻って来い!〉

目の前の道が、二手に別れた。一つは今登っている坂の道、もう一つは、霞に埋もれた先の見えない道だ。

「でも、でも、今なら蒼の里の運命を変える事が出来るんだよ!」

〈ああ、そうかもしれない〉

「だったら、そうする!」

〈それでいいのか?〉

「どうして? 蒼の里が助ければ、あの子達も西風に帰れる。

西風の長様もエノシラさんも悲しまなくて済む。イヤ事なんじゃないの?」

〈お前はどつすめる?〉

「…僕……?」

〈蒼の里に何事もなければ、ファーもアデルも平穏な日常の中

で、飛び練習はしない。アデルが砂漠に倒れたお前を見付ける事はない。お前はそこで干からびて終わる運命だ<

「え……—?」

<過去を変えちまうつてのは、そういう事だ<

一瞬怯んだタウトの足だが、それはほんの二三歩で、すぐに躊躇なく登り坂への土を蹴った。

<おい、言った事が分からなかったのか。脅しじゃないぞ!!>

「いいよ、いいんだ!」

<この……>

声はまだ遠くなって、霞の道と共に後方に消えた。

いいんだ……。それなら僕は、ファーやナユさんに、会ってさえいない。アデルにもエノシラさんにも、西風の長様にも知らない、ちっほけな僕。

そのちっほけだった僕が、今こうして、やるべき事を見付けて、精一杯駆けている。だから、いいんだ!!

坂上の建物に人影が見えた。

最初、体格のいい男性がちょっと覗いて、次に扉が開いて、長い法衣をまとった背の高い男性が出て来た。

ナユさんにそっくり、あのヒトだ!!

「長様! 蒼の長様!」

タウトはそのヒトの前に駆け込んで、両袖を掴んだ。

体格のいい男性が手を伸ばすのを制して、長殿は長い髪を揺らして、子供の目線に屈んだ。

「タウト? ソラの所の」

「えっ、えっ?!」

まさかこのヒトに名前を呼ばれるとは、思っていなかった。

「いや違う? あの子は七つか八つだった筈……」

「とっとにかく!」

タウトは混乱しそうな頭の中を、一旦端に押しやった。

「何か起こるんです! 蒼の里を消してしまうような、何か大きな事件が。防いで下さい、蒼の長様なら出来るでしょ!」

いきなり子供にそんな事を言われたって……という顔を後ろの男性がして、長がはっと顔色を変えた瞬間、さっきも聞いた高音が響いた。

——…パシリ!!! ——

目がくらんだ。

長がタウトの両手を振りほどいて、通りに飛び出した。

見上げる視線を追って、さっき地面を裂いたのと同じ十字の火花が、今度は空に走っている。火花が地平までじゅじゅと

広がったかと思うと、いきなり爆発するみたいに、空全体がスパークした。

体格のいい男性が、タウトを庇おうと覆い被さった。その脇の下から、降ってくる火花に向かって両手を掲げる、蒼の長のシルエットが見えた。

「父さまー」

細い素足が二人の真上を飛び越して、ザンバラ頭の女の子が長の右に、さっきの青銀の髪の少年が左に駆け寄って、同じように両手を掲げた。

それを最後に、タウトの視界が消えた。

「あ・あ・あ」

凄い力で、後ろ向きに押し流される。白い霧の中、手は空を掻くが、掴まる物も地面もない。

高速でさっき見たヒトや馬が、逆回転で飛んで行く。これが、時間の歪みに引く張られるって奴か?!

「た、助けて・・・」

〈ち…届かない…か〉

耳元にさっきの声したが、途切れ途切れだ。

「ぼ…僕、やっぱり、戻れないの？ 行き着く先は、あの砂漠で干からびる僕..」

〈…すまないな〉

「いいよ、蒼の里は救われたって事なんですよ。良かったよ、良かった…」

「良くな——いっっ!!」

聞きなれた金切り声が、ぼやけた脳に突き刺さった。

「良くないよくないヨクナイー!! あたしに黙って何やってんのよ、バカ!」

「ファー?!」

白い霧の遠くに、必死で手を差し出す女の子が見えた。

「手を伸ばして! 手を伸ばしなさい!」

自分が流されているのとファーのいる場所は、見えているのにまったく違うのが、タウトには分かった。

多分あの手は掴めない。

「ファー、大丈夫だよ」

「何がよ!」

「この先は、ファーは僕に会っていない未来なんだ。だからファーは悲しくないよ」

女の子の目に光がよぎったかと思うと、今いる場所を蹴って、白い霧の中に身を躍らせた。

「ファー!!」

彼女は一瞬でタウトの側に来て、手首を掴んだ。

「たとえ悲しくなくたって」

共に白い霧の中を落ちながら、ファーはタウトの手をたぐって身を引き寄せ、刻むように言った。

「そんな未来、つまらないわ、きつと」

霧を引き裂いて、視界に白い馬が飛び込んだ。

蒼白な頬に髪を張り付かせたナユタが、馬上から力一杯身を乗り出す。

「だあぁーっ！」

青年の指が、ファーの腰帯を引っ掛けた。二人分の体重が、ガクンと彼にかかる。

「ううっ！」

「ナユさんー！」

タウトは慌てて、ファーを間に挟む形で、ナユタの腕を掴んで次に馬のタテガミを掴んだ。

その瞬間、自分の重さも流れの圧力もフィツと消え、水に浮かぶように身体が自由になった。

そつ、西風のあの月の屋根で、長殿に引っ張り上げられたのと同じ感触だ。風に乗るって、こういう事なんだ。

白い馬は脚にヒシでも付いているかのように、ひと掻きふた掻きで流れを軽々逆走した。

亀裂の形の十字の光が近付き、そこを飛び越すと、一気に地上に躍り出た。天の川が見え、草原が見え、天幕と焚き火の残り火が見えた。

白い馬は草原をなぎ倒して着地した。子供二人は草原に転がり、ナユタは下馬してハナハナと腰を抜かした。

「タウト、ファー、大丈夫?!」

青年は半泣き顔で、二人の方に這いすった。

「ナユさんこそ…」

「僕は何も…」

タウトには長い時間だったのが、彼には瞬きの間だった。

タウトが落っこちた直後、いきなりファーが走って来て、躊躇なく亀裂に飛び降りた。

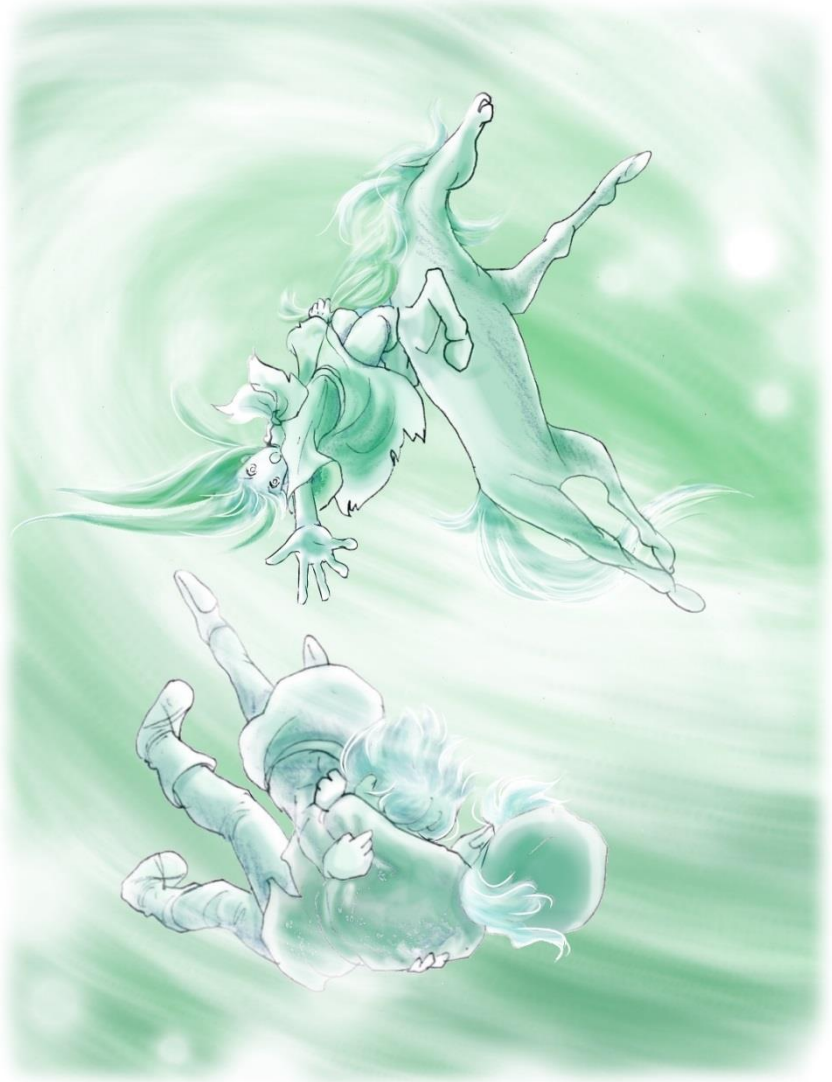
どうするのが最適かなんて、選んでいる暇はなかった。目の前の馬に飛び乗って、追い掛けただけだ。

「ファーー！」

ファーは固く目を閉じて、歯をガチガチ言わせている。

「待ってて、毛布！」

青年が、まろびるように天幕に走った。



タウトは、ファーを膝に抱えたまま、暗い草原を見やった。蒼の里は無い。運命を変え損ねてしまったんだ…。

「相変わらず情けない顔してるな」

頭上で声がして、風を巻きながら、何か降りて来た。姿を隠しているのではなく、馬もヒトも漆黒だからだ。

「アデル?!」

「干からび小僧、世界の中心は何処だった?」

漆黒の少年は、地上に着く前に、馬からひらりと飛び降りた。

「…ったく、おお寒っ! たつまんねえなあ、この寒さ。家出

小僧どものお陰で、こっちは偉いトバッチリだ」

「アディ、母さまに頼まれて来たの?」

「ファーがフラフラ身体を起こした。」

「あ、あだし、まだ帰らない。まだお兄ちゃん見付けてない…、

蒼の里も見付けていないのよ……」

「は? 何を見付けていないって?」

腰に手を当てて半身でこちらを見据える少年の後ろで、眩しい光が走り、空が十字に切り裂かれた。

驚愕して目を細める二人の前で、さっき飛び出して来た地面

の亀裂から、垂直の光が立ち上った。空の十字からも光が伸び、地面からの光と繋がって、オーロラみたいに煌めいた。

ナユタが、子供達を後ろから毛布でくるみながら囁いた。

「きれいだねえ」

天と地の光の中間に『何か』が出現した。

信じられないけれど、建物やヒトのいる、巨大な集落だった。

タウトがさっき駆け登った坂も見える。

と、見えたのは一瞬で、すうっと光が小さくなり、光と共に、それらは消えてしまった。亀裂も何もない夜の草原だけが、星明かりに残された。

「ファーがタウトの腕を、ぎゅっと握った。」

「心配すんな、即座に結界を張っただけだろ。さすがあのヒト

達は、やる事にソツがないな。お…?!」

アデルが、今度は空を見上げる。

天の川を背に、三騎の馬影が舞う。蒼の長と、少年二人。

少年の片方に、ファーが飛び付いた。

「お、お兄ちゃん…! お兄ちゃん…お…」

しんは、いきなり三年分大きくなっている妹に、目を白黒させている。

もう一人の少年、カノンは黙って微笑み、蒼の長は、ナユタ



を見て目を細めてから、タウトの前に立った。さっきと全く同じ出で立ちだ。

「タウト、貴方には感謝してもきれませぬ」

「僕…、役に立っただんですか?」

「ええ、貴方がいたから、蒼の里はここに戻って来られたのですよ」

「……」

「長々す〜」

見ると、リンの腕の中で、ファーがぐったりしている。大きくなった妹に慣れていない兄は、口をパクパクしながらアタフタしている。

招き入れられた里の中も、多分さっきのまんまだった。

引っくり返した角の馬桶を、厩番が片付けている。

蒼の長の住いの大きな暖炉に火を炊き、ファーの頬に赤見が戻った。側で彼女の手を握るタウト、物珍しげに見回すナユタ、仏頂面であぐらをかくアデル。

「あの、アデル…?」

タウトがおずおず切り出した。

「ああ? まあ、聞きたい事は山積みだろうな。知っている事は答えてやるけれど、俺だってみんな分かっている訳じゃない。

それ、初めに言っとへん

「う、うん」

「で、何だ？」

「えと…、僕は、本当に、役に立ったの？」

「さっきナーカ長が言っただろうが」

「うん、でも、えっと、声がね…、耳元でした声が、蒼の里の

運命を変えたら、僕は砂漠で干からびるって言ったんだ」

「へえ。」

アテルは分かっている顔をした。本当に、全部は知らないみたいだ。

「えっと？　じゃあ、その声のヒト、誰だか分かる？」

タウトは霧の中で自分を導いてくれた声の話をした。

「ああ、それ、多分、カワセミさんだよ。初対面で馬鹿とか阿呆とか言っちゃうのは」

「…？　誰？」

「カワセミさん」

「だから、どういうヒト？」

「知らないよ、聞いた事ないもん。聞かないだろ、普通。本人に向かって、貴方どういうヒト？　とか。まあ多分、蒼の妖精の歳長けたヒトだとは思っけれど。蒼の里に住んでいなくて、

ずうっと里の行方を捜してた」

「え…」

「んで、俺はそれを手伝ってた。もっとも、役に立っていたのはお前の姉者…シアの遠見とおみで、俺はそれを伝える伝書鳩役をやっていただけだけれど」

「………」

「ああ、えっと、どうやって知り合ったかというと、カワセミさんの息子と俺が、ダチなんだ」

「…そうなんだ」

「三年ぐらい前かな、森のイバラに羽根を絡ませてジタバタしていたのを、助けてやったの。ああ、そいつ羽根があるんだ、貧弱で飛べない羽根だけれどね。で、…おっと」

アテルはファーを覗き見て、眠っているのを確認した。

「こいつにナイシヨな。それで、馬で空を飛ぶの、カワセミさんに習ったんだ。コツが分かれば、すぐたぜ。んで、俺がそれをファーに教えた」

「…ファーに聞いてたのと違う」

「だろね、こいつ、妙に俺をソクケーしちゃったから。ま、それでいいかなーって」

「……」

「んで、何だっけ」

「忘れちゃった、いいよ、もう…」
タウトは、膝を抱えて目を閉じた。

自分の知らない所で、蒼の妖精の凄そうなヒトとか、その息子の羽根がある子とか、その子とタチなアデルとか、ちゃんと色々動いていたんだ。

僕らの旅なんて、子供の遊びみたいな物だったんだろっとな。

「いったい全体、どういう事なの？」

レンが焦れて、カノンに聞いたでした。

今、執務室の面々は大わらわで外を飛び回って、二人は留守番させられている。

「いきなり、色気付いた妹に抱き付かれたんだぜ！ 胸なんかちよっと膨らんでるし。僕、どうすりゃよかったんだ?！」

「うん、アデルの話では、三年すれちゃったって。大変だよね、西風に戻ったら。勉強、めっちゃ遅れちゃってる」

「そーいう問題じゃないだろ?」

「そーいう問題で済んで、よかったんじゃないかな…」

カノンは窓から外を見やった。彼の眼は、里の外のハイマツの丘に立つ、ナーガ長とカワセミを映している。

「ナーガは何だったんだと思う?」 ああ空の十字

水色の長い髪を払って、カワセミは蒼の長に問うた。

『災厄』とは違う物だと思えます。意思ある者の悪意の攻撃でもない」

「うん、ボクもそう思う」

「認めたくはありませんが…」

「うん、認めたくないな…」

『自然現象』…、そういった必要があるから、この世の流れが作り出した、当たり前前に自然な現象」

蒼の長は、口を結んで虚空を見据えた。

「この世の流れが、蒼の里イリマセンってか…」

カワセミも同じ方向を見ながら、肩を竦めた。

「へこみますね」

「冗談じゃない、こっちだって生き物なんだ。生き物だから、当然抗う」

「はい」

「生きているから、学べるし、やり直せる」

「はい」

カワセミは、遠く離れた丘の端に立つ、ヒトともいえぬ灰色の影を、視線で指した。

「奴も、蒼の里を時空の隙間から引っ張り出すのに、力を貸し

てくれた。助かったよ、ボクとシンリイだけじゃ、無理っぽかったから」

大昔、袂たもこを別った、羽根を持つ祖先…、彼等だつて、太古の杉の森の奥から、風の末裔の動向を見据えていた。

ナーガが黙つてそちらに深々と礼をすると、緋色の片羽根をまとつたその影は、ふいっと消えた。

「何にしても、あのカキンチョヨが頑固な扉を開いてくれなきゃ、着地点すら作れなかつただけだね」

「タウトですか…、まったく子供つてトンでもないですねえ。とても敵いません」

「子供に対抗しようとするな、無理だ」
「おう」

三年前の秋の夕方…、いきなり蒼の里を襲つた『自然現象』は、里を丸ごと滅す(めつす)力を持っていた。

ナーガと、他の術者達の力を合わせて、瞬時に強固な護りを作り、辛くも難は逃れたが、強力な結界を慌てて張つた為、別の歪みが生まれた。そのまま蒼の里は、時間の隙間に堅く押し込められてしまった。今から考えると、それも『自然現象』の仕業なのかもしれない。

そこまでは、カワセミにも調べは付いていた。南西の太古の森にこもつた片羽根の祖先が、一部始終を見ていたからだ。

しかし、蒼の里を引つ張り戻そうにも、『取っ掛かり』と『着地点』がないのだ。それは、頭だけで考えても、答えの出せない物だった。

「タウトはここで、どんな答えを出したんです?」

「想像付くだろう?」

「聞かせて下さいよ、一応」

カワセミは、明けようとする地平の光を水色の瞳に湛えながら、言った。

「蒼の里は、無くてもいい……だよ」

血みたいな太陽がそっくり顔を出すまで、ナーガは黙っていた。

「それが、蒼の里をこの世界にひっぱり戻すキーワードだったのですか」

「参るよな、ボク等からは、絶対に出て来ない答えだ」

「心に深く刻みます」

蒼の一族は、草原やその周囲に生きる者の為に、大昔から尽力して来た。それが、長く生きて知恵と知識を蓄えた者の、摂

理だからだ。その信念は、きっとこの先も変わらない。

「でも、控える事も要されるのでしょね。やり過ぎたのでし

よう」

蒼の里を信仰の対象として、依存し、おもね過ぎる風潮が、きっと良くない物だったのだろう。

「お前さんだけの責じゃないさ」

「はあ、貴方にそう言って頂けると、助かります」

「難しいだろ、長って」

「難しいですね」

二人が何となく黙ってしまった所に、片羽根の少年が、愛馬を曳いて戻って来た。さっきの祖先は右羽根で、こちらの少年は左羽根。

「お前には、何となく読めていたのか？」

カワセミの問いに、シンリィは神妙に首を傾げた。

鍵を開いたタウトが時空の亀裂に落ちこちたのも、制止を聞かずに過去に干渉しに行ってしまったのも、予測出来ない事態だった。

結果、ナユタが白蓬(しろよもぎ)で救いに行つて事なきを得たのだが、シンリィがそれを予測していた訳ではない。だって、分かっていたのなら、シンリィが救いに行けば済む事だ。

彼はただ、何となくあの三人が好きで、何となく馬を貸したかっただけなのだ。

ナーガは思う。

だけれど、あの時、タウトが知らせてくれた事による、ほんの一瞬、先んじられた時間。彼が騒いだから『火事場の底力』のある二人が側に来ていて、即座に協力を得られた事。あれがなかったら、今どうなっていたのかは、誰にも知り様がない。

まったく、子供の未来に繋げる力って奴には……………

本当に、まったくもって、敵わない。

く 風 の 行 先 く

灰色の空から、チリみたいな白い物が落ちて来る。

「これが雪」

放牧地の奥の枯野の土手で、タウトはぼんやりと座り込んでいた。ファアの具合が回復して最初の暖かい日に、南へ向けて旅立つ予定だ。

「なーんか、思っていたのと違う」

指の上で溶けて水滴になるそれを見て、タウトはポソッと呟いた。

「どんなのだと思っていた？」

いきなり声を掛けられて振り返ると、オレんシの瞳の少年がすぐ後ろにいた。

「あっ…？ えっと…」

「座っていい？」

「…うん…」

カノンは微笑んで隣に来て座ったが、タウトは微妙に目を逸らした。

「僕も、さっき初めて雪を見て、そう思ったよ」

「えっ？」

「ほら、もったこう、大きくて、五角形や六角形で」

「あっ、そうそう！ 花みたいな形で、白くて透き通っていて！」

「そんなのが、空からポロポロ落ちて来ると思って、凄く楽しみにしていた」

「僕も、僕もそうです！」

「父様の写本に、スケッチが描いてあったから」

タウトが顔を上げると、少年は目を細めて、自分の袖口を差し出した。

「よく見ると、そんな形をしているんだよ」

「えっ？」

タウトは慌てて、その毛糸の袖口に付いた雪の塊を凝視した。
「ほ、本当だ！ うわー、こんなにちっちゃかったのか！」

「凄いやね」

「うんー」

二人は、袖口の塊が溶けて消えるまで、黙って眺めていた。

「僕は、絵に描いて教えて貰っ…たんデス」

「そう…」

少年は、腕を降ろして袖の雪をはらった。

「ねえタウト、君にお願いがあるんだ」

「あ、はい？」

タウトは何でも聞くつもりで、神妙に返事をした。

「西風の僕の部屋に、書物が一杯あるんだ。それさ、たまに風に当てたり虫干ししたりしてくれないかな」

「え？」

「僕、この冬、帰らないから」

「ええっ！」

「まだ学ばねばならない事が山とある。長殿が、今フアーが寝かされている暖炉の場所を使わせてくれるって。そこで一冬、指導を受けるんだ」

「だ、だって、西風の長様が待っているよー！」

「うん…」

風がちよっと吹いて前髪が顔を覆い、少年の表情が分からなくなった。

「学べる時間は限りがあるし、僕が今やるべき事は、それなんだ。ルウシエルもきつとそう言う」

「……」

もしかして、あの十字の光が西風にも襲って来る事を、考えている？ その時の為に、今、出来るうちに、もっと力を付けておこうと。ふつとそう思ったが、何だか口に出したら薄っぺらくなる気がして、聞けなかった。

「窓を開けて部屋に風を入れて、気に入ったのがあったら読んであげて。書物も寂しがるから」

「でも……」

「ん？」

「西風の長様…僕を嫌かもしれない」

「ううん……」

タウトは、信じられない！ って顔をして、少年を睨んだ。いくら勉強しか頭がない書物の虫だって、僕より年上だろ！

「ああー、そうか。アテルに聞いていない？」

「何を…デスか？」

「亡くなった君の母上と、ルウシエルと、結構仲良かった事」

「ええええええ——！！」

「何だよ、カノン、喋っちゃったのか。お喋りだな」

既に駆け込んで来たタウトに胸ぐらを掴まれ、アテルは馬装の手を止めた。

「だって、あっちではトップシークレットだったんだぜ。知っていたのは、海霧の長殿と亡くなった巫女殿…、西風では姉者と俺…、あと、三峰のフウヤ」

「ごめん、タウトは知っていたかなと」

カノンが呑気な顔で、後から入って来た。

「蒼の里が行方知れずになった、次の眷かな。鯨岩に滞在していたフウヤが、訪ねて来たんだ。俺だって、その時初めて聞いたんだぜ。鯨岩の高波を予知したのは海霧の巫女殿で、それをフウヤが、ルウシエルの名を語って、皆を避難させたんだって」

「……—」

「その他の西風の長殿の諸々の予言と活躍も、巫女殿の協力あつての事だったんだ」

「うん、自分の母親ながら、いきなりそんな予知能力が備わるなんて、ちょっと嘘臭いなって思った」

カノンは相変わらず呑気な顔で、馬栓棒に座って笑っている。「仕組んだのはフウヤだけれど、言い出しっぺは巫女殿だったって。最初は、姉者に対する罪滅ぼしに、ちょっとでも役立つ

たい気持ちだったんだろな」

「ぜんぜん聞いてないよ！ そんなこと」

「言える訳ないだろ、お前みたいなお子ちゃまに」

「~~~~~!!」

「フウヤが三峰に戻った後、俺が連絡役を引き継いだんだけど…、奴ら、俺が飛べるのをイイ事に、予言のない時でも手紙をやり取りし出してな。なんつうか、通じ合う物でもあったんじゃないか？ お互い、周囲に弱音をこぼせない身だし」

「なんだよ、それ！ それって、なんなんだよ！」

タウトはもう、カ一杯脱力して、板壁に背中をぶつけた。

「ぶて腐れている暇はねえぞ」

「c.c.」

「お前の姉者が巫女を引き継いで、茶番はまだ続けるみたいだし、たまにカワセミさん宛の予言もあるんだ。俺はもう、こんな面倒臭い役回りは御免だ。これからはお前がやれ」

「えっ？ だって…」

「だって、何だ？」

「僕、飛べない…」

「だったら飛べるようになれ！ 阿呆」

「……うん」

「聞こえねえぞ」

「うん！ 分かったっ!!」

「よし!!」

「ルウシエルの茶飲み相手も宜しくね」

「……」

風露の青年は、やはり南には向かわなかった。

小雪のちらつく中、わりと元気に手を振って、二人の子供よりひと足先に、蒼の里を後にした。

草の馬で送るといいうのを断って、近隣で調達した晩馬に座布団を敷いて、相変わらぬのタラタラ衣服を風になびかせながら、黄金の海をゆっくりと渡って行った。

たとえ楽器造りになれなくても、自分にはあの尖塔の谷の為に出来る事がある。その自信を得られただけで、彼には十二分だった。

「最初は彼を『鍵』だと思っていた。子供達はその『導き手』だ」と

ハイマツの丘。遠く地上を行く栗毛晩馬を見送りながら、カワセミは、蒼の長を振り向いた。

「貴方でも、見誤る事があるのですねえ」

「見誤りっ放しだよ、昔から。だからこうして隠居も出来ないで、フラついてるんじゃないか」

風花の空、水色の妖精が「ぎんぎんの馬で真っ直ぐに舞い上がり、片羽根の少年を乗せた白蓬がくるくる周りをながら着いて行った。

ナーガは、先程少年に渡された、半分の青い蜜柑を胸に当て、二人が見えなくなるまで、そこに佇んでいた。

あの二人が、里の外を居場所にする理由が、今回やっと呑み込めたのだ。自分や里と距離を置く為ではない。その逆だったのだ。

「そんな事にも気付けなかったなんて…」

「ああ——っ」

冷気を引き裂く高音に振り向くと、手足を引っ掻きキズだらけにしたファーが、ハイマツの中から抜け出して来た。

「あの白い馬の持ち主！ お礼言いたかったのに…」

「それは残念でしたね。もう具合はいいのですか？」

「あっはいっ、もうすっかりいいですー… あ…あの子は、いつ戻って来ますか？」

「さあ、今日明日とかではないと思いますよ」

「そうですか…」

「大丈夫ですよ。貴方が馬を貸して貰った事にとっても感謝していたって、ちゃんと伝えましたから」

「その他にもあつたんです」

「っ？」

ファーは、懐からハンカチを出して、大切に包んだそれを開いて見せた。薄緋色の、小さい羽根。

「………」

「これ、あの子のなんでしょう？ リリさんが、そう教えてくれた。朝、あたしの手の中にあつたの。それで…」

「それでっ？」

「お礼を言わなきゃって思ったの。それって、凄く大切な気がっ」

そこで、ファーは、電気に触ったみたいにピョンと飛んで、長に改めて向き直った。

「あ、ありがとっございましたっ。えっと、暖かくして頂いて、看病して頂いて、それからえっと、お兄ちゃんを大切に頂いてっ」

「はいはこ」

「それから、そうだわ、タウトにもお礼言わなきゃ。アデルに

もだわ。あああつ、ナユさんにお礼言い損ねた！ そうだ！」
女の子は首に提げていた笛を手を取って、子供用の吹き口を外した。すうっと息を吸って奏で始めた曲は、時々掠れたけれど、長にも聞き覚えのある曲だった。

「ナユさんやあの子にも、聞こえたかしら」

「きつと届いていますよ」

「また会えるかなあ」

「ええ、貴方が飛びのがもつと上手くなって、蒼の里と自在に行き来出来るようになれば、きつと」

女の子は笛を胸に当てて、にっこりした。

「他にお礼を言いたいヒトは、いませんか？」

「えつと……」

ファーは指を折って数えた。

両手で足りなくなった頃、長がその手をそっと包んで、優しく言った。

「私は、貴方をこんな風に育てて私に逢わせてくれた、貴方のお父さんとお母さんに、お礼を言いたいです」

女の子は、はにかんで下を向いた。そうしてもう二人、お礼を言いたいヒトが閃いた。

タウトのお母さん、タウトをこの世の送り出してくれてありがとう。

タウトのお父さん、タウトに逢わせてくれてありがとう。

長は、羽根と笛を抱いて目を閉じる少女を前にして思った。

自分や先達たちが積み上げて来た先に、この子供達がいるのなら、そう悲観した物でもあるまい。

顔を上げると、雪雲の切れ間が眩しく輝く。

明日には雲も退き、西風の子供達が、あの空に飛び立つ。

く 余話 く

三峰にも雪が降った。

晩秋に色付いた峰々を塗り替える白色を、部落近くの峠から眺める、三つの人影。

「粉をまぶしたみたいだな」

漆黒の馬を連れたアデルが、マントの肩をブルツと震わせた。「本格的な雪が来たら、暫くはこちらに來られなくなるだろう？

今日くらいは、カーリーに会って行けばいいのに。この間市場で手紙を届けてくれた時だって、目鼻の場所に居たのに」

ヤンが、部落を見下ろしながら言った。

丁度カーリーが、部落端の自宅を出て、桑畑の道を歩いている

のが、小さく見える。背中には、生まれたての赤ん坊。

「はいよ」

アデルは、小さな頭を見つめながら呟いた。

「早く砂漠に戻って、姉者やエノシラさんを安心させてやりたいし。海霧のおっさんとシアもね」

「今回は本当に大活躍だったね」

ヤンの隣のフウヤに言われて、少年は鼻の下をこすった。

「俺は…、パシリをやっただけだよ。風露でガキンチョどもが危険な目に遭うとか、色々な予知をしたのはシアだし。風の精のご先祖の居場所を突き止めたのは、ヤンの情報網じゃないか」
「それらをカワセミさんに報せたからこそ、役立ったんだ。すごいよ、アデル。もう、ほとんどジェット気流も使いこなせるんだろっ？」

褒められ慣れていない少年は、「シ」シと鼻の下をこすってうつむいた。

「カワセミさんに、めっちゃしこかれたからな。いつかお前に必要になるって。その時は意味ワカンネーヨだったけれど」

「預言者だからな、あのヒトも」

「へえ?!」

「知らなかったのか?」

「知らないよ、聞かないだろう、普通」

少年はもう一度、鼻の下を「シ」シこすった。

「俺は本当に、ただのパシリだよ。あのガキンチョどものゆらかした事に比べたら、全然大したことじゃないよ。全然…」

「その、シドの娘とシラの息子、一緒じゃなかったんだな。会ってみたかったなあ」

「あいつらの足並みに合わせていたら、トロくって凍えちまう…あっ!」

桑畑の坂をホテホテ歩いていたカーリが、雪に足を滑らせた。思わず三人とも身を乗り出した。

しかし、彼女は転びながら前にのめって、背中を庇った。

「怪我は?」

「立ち上がった、…大丈夫みたい」

土を払って、照れ臭そうに赤子をあやしながら歩くカーリを、男三人は暫く黙って見ていた。

「咄嗟にあんな風に来るんだもん。』おかあさん』って凄いな
ヤンがふっと呟いた。彼だって、最近同じタイミングで父親になって、妻の豹変ぶりに驚きっぱなしだ。

「あのド天然でボンヤリ者のカーリがなあ」

アデルが、子供らしくない感心のしかたをした。

「モエギのおかげだよ」

フウヤがフツと言って、アデルは視線を下に向けたまま止まった。

「アデル、カーリは、君のおかあさんに会って、君のおかあさんと過ごして、おかあさんって物を学んだんだ。モエギに、大切な大切な物を、たくさん貰ったんだよ」

「……」

アデルの母は病弱で、義妹であるカーリが、ずっと彼女の側で看病と育児をしていた。アデルにとってカーリは、もう一人の大切なおかあさんだった。

母が、自分を身ごもった時、とても子供を生めるような身体じゃないって医師に言われた事を、彼女が亡くなってから、初めて知った。母の看病にすべてを捧げていたせいで、カーリの嫁入りが、ずっと遅れていたという事も。

「自分が生まれた事でどうこうくって呪縛に縛られていたのは、タウトだけではなかった。」

「カーリに風邪ひかせるなよ！」

少年の言葉とともに、漆黒の馬は、雪空に舞い上がった。

三峰の二人は、見えなくなるまで手を振った。

黒い点が消えた後の空を、雪が白く塗り替え、三峰にまた冬が訪れる

くおしまいく

二〇一四・七・七

